そんまさよし

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そんまさよし

【Ｎコード】
Ｎ６８６６Ｘ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
青白い月の麓でまずはシュエルから話を開始します。童話的要素を含みつつファンタジックで素晴らしい感じを目指して頑張っていきますでのみんな読んでください。たぶん楽しいから！

1

青白い月が浮かび上がり満月。
雪、舞い落ちる平原。
うっすらとした青の薄明かりが景色を映してくれるばかりの、物静かな場所。
茫々とした草原は雪化粧され、青白い満月に照らされることによって、人の心持ちを寡黙に導いて幻想の中に閉じ込めて仕舞うような。しんと静まり返っている、仄かな色遣い。
青白い月を見上げる仰向けの体勢、寝転んだまま、氷の結晶をその身に受けている者がいる。
一人、生地の厚い白色の甲冑を身につけて屍のように動こうとしない。だが肌や衣に触れる粒のような雪が溶けないのだから、彼は屍ではないだろう。熱を持ち、呼吸をしている。
激しい呼吸をしている。彼の身体は肺を大きく動かしているから、膨張しては縮むというその頻度は速くて、異常な容態であることは間違いない。大きく開いた口から覗ける舌上に、雪の欠片が張り付いて溶けていた。彼の意識は朦朧としているらしく、青い両眼の眼差しは力を無くしたまま上下左右に忙しなく動いている。
やがて瞳の動きが天にある青白い月のように静まった時、白い甲冑の男は死ぬのだろう。
ただでさえ今も、虫の息に違いない。少なくとも青白い月の薄明かりでも輝く銀色の髪は、既に雪によって白く染められていた。
彼の脳内では走馬灯のような記憶が再生されている。
映る情景。そこで駆けているのは堕魔たちを討伐するために苦楽と生死を共にしてきた例えばザナとか、グランポとか、サンタナとか、ドードとか、ジェニファーとか、バランコとか、サスとか。名

を呼び合い、堕魔を殺すために日々共に生き、鍛錬し、行動した仲間たちの姿。

世界は絶望に塗れていた。凶暴な堕魔たちによって、か弱き人間は奴隷にされて労働させられ、飯も碌に食わされず、労働力として使い物にならなくなったと見るや、グルメな堕魔たちによって血肉を骨ごと食べられてしまう。女子供は特に食として好まれ、食われる。男は労働力としてひたすらこき使われて後に、陰茎と睾丸だけを食物にするために切り取られてから、無惨に斬り捨てられて蛆の餌にされる。堕魔たちは残った骨だけを好んで食し、切り取った陰茎と睾丸を骨で串刺しにして焼いて食すのは、一時堕魔の間で流行った。数多くの堕魔が『あまり、美味しくもないんだけど』と心の中で思いながら、陰茎と睾丸を串刺しにして焼いて。でも流行だった。

挑発的で、背徳的で、非生産的な。悪意こもった悪行。

堕魔たちの好物とはまさに、その堕落した悪行そのものと、それに付して発生する人々の憎悪や怨念。自らは非生産的な生活をし、生活のために必要な労働は、奴隷である人間たちにさせる。自らたちは貪るばかりで。そういう性質を持っているのが堕魔であり、そんな下等生物に支配されている現実が、人間という種の実状だった。その世界の現実。

男は走馬灯の中、下等生物の堕魔を、自らの得物である変幻する刃を硬化させて、その切っ先で突き刺した時の記憶。それを見る。その瞬間。堕落することを生業とする堕魔の背中に刃を突き立てて、濁った茶色の血を噴き出させて絶命させた。腐臭。吐き気を催すような、不愉快な。

堕魔討伐騎士団として、何千、何万と駆除してきた。そして腐臭を嗅いできた。あの鼻が？げるような体臭を。内部に詰まった腐敗、その悪臭を。

様々な場面が移り変わる。森林。雪山。砂漠。平原。火山。それら全て、どこにでも奴らは群がっていた。堕魔討伐騎士団は各地方

に幾らでもいるその悪魔を抹殺するため、その組織を巨大にし、結束は堕魔に対する憎しみで自然と強まっていった。各地のまだ奴隷化していない人間、かつて奴隷だったが幸運にも逃げ出した人間、境遇はどうであれ堕魔への憎悪と怨念が募っていることは皆一緒だった。男もその内の一人で、そして今はこういう静かな、雪の降る場所で横たわっているというわけだ。

彼は血の涙を流していた。比喩ということでもない。紛れも無い赤色をした血液を両眼から流している。それは死の兆候でもあるし、魔の者に体を支配されるその前兆でもあったのだが。

雪降る平原、青白い月明かりにかすかに照らされて、二つの人影が浮き上がってきた。

二つの人影は家への帰路の途中に、男の倒れている姿を目撃した。

傍らは髭を生やした紳士。傍らは幼い少女。

彼ら二人は顔を見合わせてから、倒れている男の下に駆け寄った。

「この人、意識がない」

「危険な状態だ。雪の中で横たわっているのだから、こうもなる」

男はすでに軽い痙攣すら起こしていた。早く何らかの処置を取らなければ死に至るであろうことは疑いようが無かった。そういう気配の強い、死の匂いを纏った痙攣を起こしていたのだから、紳士も無理をして男を背負う。ただでさえ長身で重いのに加えて甲冑を纏っていると来ているのだから一苦労だが、命のために。

暖かいところへ。彼らは急いで足を向わせた。

例えば篝火のあるところとか。

2

暖かい炎がゆらめきながら熱を放っている。
火はオレンジと真紅で、その二色が混ざり合い踊っていた。火花が爆ぜて音を経てている暖炉の中心にある炎の力強さは、青いばかりだった男の瞳に光を宿し精気を分け与える。少女が粉末を使って拵えた暖かい牛乳、コップは鉄の材質に近い触感だが、牛乳の熱をまったく通しておらず外側を両手で持っても、まったく熱くない。ただ口をつけて牛乳を含んでみれば、芯から暖まるような熱だ。粉ミルクといえどもミルクは身体に優しかった。
痙攣や意識の混濁は、二人への救いの手によって消えてくれた。白い甲冑だった男は厚手のセーターを着せてもらい、ふわふわする毛皮の一人用ソファに座らせていただき、三日前まで冷え切っていた身体は、手厚く看病してもらったおかげでもはや暖かい。
レンガで造られた小さな家屋。家具は少なく、食べ物のある気配がしない。どこか生活感が部屋全体に仄かで、多少の違和を感じさせられるのだが、それについて尋ねるのは失礼だろうと思いつつ、コップに口を付ける。口内に広がる匂い。あっという間になくなった。
「すっかり元気になりましたね！　三日前とは、別人みたいに」
少女が可愛らしく両手を伸ばしていた。愛想ある仕草の彼女は空になったコップを受け取ってくれて、「もう一杯飲みますか？」と上目遣いに尋ねてくる。小さい。ピンク色の髪色をしている、ニキビ一つない潤った肌を持つ彼女は、まだ年端も行かない。
「いや、遠慮させていただきます。…三日間も、お世話になってしまった」
一般の人に騎士団たるものが命を助けられ、食べ物を分け与えてもらったという事実は、騎士としての誇りを持つ彼には忸怩たる思いだった。だからこれ以上、世話をしてもらうのは遠慮したかった

のだが、紳士、が別のコップに粉ミルクを注いだものを持ってきて、彼の目の前に出した。
「そう、遠慮なさるな。粉ミルクの一杯や二杯で申し訳なく思われてしまうのでは、正直言って、私どもが恥ずかしい。そこまで貧乏ではありませんから、どうぞお気になさらず、御身体を暖めになるといい。何なら、後一日はお泊りになっていった方が良いのでは」
「そうもいきません」
「外は今、吹雪です。そんな過酷な環境に人様を放り出すことはできませんよ。それはそうですね……私の誇りにかけて、そうしたいのです。どうか、この誇りを受け取っていただきたい。もう一晩ほど、ここで身体を暖めていってはくれませんか」
紳士は男にコップを手渡してから、丁寧にお辞儀した。
男は紳士の持つ誇りに関して具体的なことは尋ねなかったが、誇り、という言葉を用いる相手には妙な親近感が湧くと共に、そういう相手の親身を断るのは無礼だという気持ちになる。
男は手渡された粉ミルクを啜らせてもらってから言った。
「では、あと一晩だけお世話になります。この御恩はいつかお返しいたします」
「いえ、何もお気になさらず御身体をお休めください。暖炉の火を灯すための薪はまだ残っているのですから……そういえば、あなたのお名前を尋ねていませんでした。教えていただいても？」
「これは失敬。私の方から名乗るべきでした。私の名はシュエル。堕魔討伐騎士団のシュエルです」
「そうですか。シュエル様。その、だまとうばつきしだん、というのは組織の名前でしょうかね。あなたのような方が身を置いている組織なのですから、きっと素晴らしい組織なのでしょうね」
シュエルは紳士の言葉はおかしいと思った。
堕魔討伐騎士団は全ての人間たちにとっての希望であり、その象徴。
各地にその勢力を広げているもっとも有名な堕魔に対する反抗勢

力である組織なのに、それをこの紳士は初耳だという素振りだ。
シュエルの背筋がゾクッと震えて、粉ミルクの入っているコップを見下ろすと、果たしてその液体の表面に奇妙な膜が浮かんでいた。ホットミルクに出来る膜とはまた別の種類の、渦巻いている不自然な模様は禍々しい。まさか…と思考した時に、堪えることの難しい眠気が突如として襲い掛かってきて、抵抗もできずコップを指から落としてしまい、脱力した。
びちゃ。白い液体が絨緞に染みを作ったが、少女も紳士もそれを咎める様子すら見せない。
二人は顔を見合わせると、
「「……美味しそうだね」」
と声も合わせて嬉しそうに微笑んだ。
シュエルはその言葉を耳にしながらも、目を閉じるしかなかった。
ねむくてどうしようもないのは、睡眠薬でも盛られたということだろう。

3

目を覚ましたら解けそうにない程にきつい縄で手足を拘束されていて、ご機嫌な調子の鼻歌が紳士のものと少女のものの二種類、聞こえて来る。まったく何処に食材を隠していたというのだろう、人間一人分を丸々呑み込んでしまう程に巨大な鍋があって、そこで何だか知らないが汁を煮出しているように見える。湯気が立ち昇り、甘味とスパイスの混じっている香りがシュエルの鼻につくのだが、良い香りだ。しかしもう一味足りないようにも感じる。キメが無い。おそらくそのキメとなるのが自分なのだろう、とシュエルは眠りに落ちる直前の『美味しそうだね』を思い出して悟る。

テキパキ行動する紳士と、小さいながらちょこちょこ懸命に動き回る少女。シュエルはその二人の後姿を眺めながら、こいつらは何者なのだろうか、と疑問に思う。普通に考えてみたら人間を食する輩など、堕魔以外にはいないのだが。しかし不自然な点がいくつかあるので、堕魔とは違うかもしれないとシュエルは考える。

だが正体は問題ではなく、どうやって切り抜けるかが重要だ。

見たことの無い食材が煮込まれている。若草色の海老。触覚のある魚。どうみても虫。脂身の多い肉。それらが鍋からはみ出しつつ煮込まれていて、ぐつぐつと健康的な音を発しているのだがあれが全て煮立った時に完成なのだとしたら、その時に放り込まれるのか、それともうすぐ放り込まれて自分も煮込まれてぐつぐつになって細胞単位で崩れてスープになるのか。

逃げなければ、と思うが縄はしっかりと結ばれている。

シュエルは身体の柔らかさに自信があったが、それでも縄抜けは出来ない。

「だめですよ～。ご馳走さんはエネルギーをとっておいてください。私達が何のために三日間もあなたを看病したと思ってるんですか～」

「私達は人を食すのが好みでね。そのために人を買いに街に出てい

たんだが、美味しそうな人間が売られていなかった。不運なことに。その帰り道、寒い雪降る夜の中、雪原に仰向けで気絶していたあなたを見つけたことは……」

「ラッキーでした！　ああわくわくしてきたぁ」

二人は陽気な口調で人食いの話をしながら調理を進めている。

一度も後ろに振り向いていないのにシュエルが起きたのに気が付いたのだから、尋常ではないらしい。

やはり人じゃない、とシュエルは気がつかされる。しかし堕魔でもない、と。

仕方が無い、と『力』を使うことを決意する。体力や精神力を削るが、命を守るためには使うことをためらってはならない力だ。シュエルは念じる。騎士としての己、シュエルとしての己が信じる神を呼び寄せるための祈祷。神に力を貸してもらうということだ。

しかし、神光を感じない。

祈りをより強めてみても、力の源となってくれる神光が集まってくる気配が無い。まったく無い。皆無と言ってよかった。神光が集まってこないなど、シュエルにとっては騎士同士の練習試合で十連敗を喫したあのブランクの時期以来だ。

神光が無ければ力を発揮することは出来ない。シュエルは絶望たる気分に晒されて巨大鍋を眺めた。ぐつぐつ煮立っている。

湯気が広くはない部屋中を覆い隠そうとするから、紳士の手によって窓が開かれて夜風が入り込んできたが、吹雪が入り込んでくることはなく、しんしんと外は寒いと言った具合で、窓の外には月が見えるのだが、青白い月だ。青白い月。……青白い月？

シュエルは目を瞬かせた。手は縛られているので目を擦ることはできないが、できることなら目を擦りたかった。両手でごしごしと。

なぜなら、青白い月を眺めたことなど、かつて一度も無いから。何か、現象とでも言うのだろうか。そもそもどうして私はこんな寒い地域にいるのだ。雪など降っているのだ。そうだ私は倒れていたというのだが、倒れる前に私は一体何をしていたのか思い出さなけ

ればならない。起きてからずっと、暖炉の火に気を緩まされていたせいで思考回路が鈍っていた。私は倒れる前、気絶してこのレンガ家屋に運ばれるその前、一体何処で何をしていた。何をしていたから気絶していた。思い出さなくてはならない。青白い月。湯気がさらに凄まじい巨大な鍋。ぐつぐつ。ああ、駄目だ上手く頭が働かない。睡眠薬のせいか。ぼんやりとしてしまっている。

「うう、さむい～」

「しかしお料理の方はいい塩梅になってくれます。あまり熱すぎても、食べ辛いんですから」

「わたしはあつあつが良い」

「またそんなわがままを…。では、熱々が食べれるように、最後の食材の調理を早めてしまいましょうかね」

「大賛成！」

「跳びはねるのは良いのだが、鍋に注意してくださいよ。前みたいに……」

「説教なんてやめてよねー。ああ、内臓は健康だといいなぁ」

「骨は丈夫そうですね。噛み応えがあった方が好みです」

「血の味によってスープの出来が左右されるよねぇ。あんまりサラサラすぎても、どろどろしすぎてても駄目だなぁ」

「君はこだわりが多いからねぇ。……さて、どんな具合かな」

「もうあいつの調理できるかな！？」

少女はシュエルに指を突き出しながら紳士に尋ねる。紳士の返事はあまりよろしいものではなく、う～ん、と彼は低く唸った。少女は唸りを聞いた途端衝撃を受けたような顔つきになって、我慢できない～、と駄々を捏ね始める。

対してシュエルはまだ命は繋がるようだと安心するが、それもおそらく数分程度の延長だろう。

絶望に塗れながら俯いて、もう一度祈祷してみるが神光はちっとも集まらないので、さらに絶望する。少女や紳士のはしゃぎ振りが煩わしいが、力が無いのでは縄も解けない。

それでも何とか解こうと足掻いている時、ふとシュエルは自身の影が気にかかった。
というのも、影が自身とは全く関係の無い動きをしたように見えたからだ。錯覚か、と思いながらも確かにおかしな動きをしたようにも。シュエルは暖炉の火によって作られている濃厚な黒の影に注目した。そして、うごいた。見間違いじゃない。影は手足を自由に伸ばし……伸ばし過ぎとも言える程に……影はみるみる巨大化していき、驚くべきことに壁や天井にまで広がって張り付いた。
それはもはやシュエルの影とは言えなかった。シュエルの影のふりをしていた、何か、だった。
幸いにして紳士と少女は二人で陽気な鼻歌を口ずさんでいる。
シュエルは影に向って話しかけてみた。影が手助けをしてくれるかは怪しいものだが、藁にも縋れ、だ。
「聞こえますでしょうか。或いは、喋れますか」
尋ねてから間を置かずに言葉が返って来た。
(ああ、聞コえルな)
シュエルはその口調を聞いた瞬間、影に対してあくまで雰囲気だが面倒臭そうな奴だと認識した。しかしそう感じたことを表情もしくは態度で表してしまえば、さらに切迫した状況になり得ると想像できるから、その認識を飲み込んで言葉を続ける。
二人に聞こえないよう小さめの声量で。
「な、ならば、不躾で申し訳ないのだが、見ての通り私はとても困っています。私は堕魔を討伐するという使命がありますが故に、まだ食われる訳には参りません。御力を貸していただけないか？」
(ムリだな)
「なんと！」
あまりの即答にシュエルは驚きを隠せない。
影はそんな彼を嘲笑うかのように牙を剥き出しにした。
(我ヲ何者と思ッテ平気でタメ口利イてんだよボケ野郎ガ。我はオマエヲ滅ぼス為ニ作らレし魔の獣。つまり魔獣ダ……。堕魔ヲ討伐

するだァ…？　魔獣ハ堕魔と同盟ヲ結んデいル種族ダぞ。そウイウ悪魔ニ取り憑カれテおいて助けテ欲しいなド、良ク言えたモノだなぁ…。尊敬スルよ、悪イ意味でさぁ……）

「魔獣……！　それに、今、取り憑かれた、と言ったか……。誰が、取り憑かれたと……」

絶望に塗れるシュエルがさらに深い闇底に堕ちて行くのを弄ぶようにしながら、魔獣はハッキリと彼に告げる。

（オマエだよ、オ・マ・エ）

4

（イイね、イイねイイねソノ絶望シテル表情！　今、オマエ自分がどんな顔シテたか分かルかよ！　スげぇ阿呆面デぇ、かナりイカレポンチだ！　我ハ魔獣。オマエの絶望を全テ吸い尽クして、干からビた干物に変えてヤるつモりダカら、楽しミにシテおいてクレ！　我もオマエの絶望を食らイ尽くセるのヲ楽しミにしてイるからよォ！　どうした、何カ言えヨ。絶望ニ打ちひしガれて何も言エねえノのか。アア、少し喋リ過ぎテ疲れタ。おいオマエ、困っていルと言ったな？　助けテ欲しイとさっき言っていたな！　……我はさっきムリと言っタガ、それは嘘だとモ言えルぞ……）

耳を通さず頭に直接響いてくる魔獣の声がはしゃいでいたのが、急に神妙な調子になった。

魔獣は悪魔の一種だ。その悪魔が神妙な口ぶりになったということ、それは……。

シュエルは取り憑いた悪魔が自分に取引を持ち掛けているのだとわかった。

シュエルは紳士と少女がまだ調理にいそしんでいるのを確認してから、声を沈めた。

「ムリというのを嘘にするには、どう振舞えば良い」

影はそう言われて嬉しいのだろう。影の両手を大きく広げると、ギャハハハと汚らしく笑った。あまりの大きさに二人に気が付かれるのではとシュエルは思ったが、どうやら影はいくら騒ごうともその声はシュエルにしか聞こえないらしい。湯気の中、紳士と少女は相変わらず鼻歌混じりのご機嫌だ。

笑うのを止めて影は言った。

（オマエも見当がツイているだろう？　我ハ悪魔の眷属である魔獣。なラばそウ、取り憑いタ人間には取引ヲ持ち掛けるノさァ。俺ハ多クの絶望ヲオマエから吸い取ッテ快楽を得ル！　その代ワリにオマ

エは不幸なソの御身ヲ、シばしノ間はまだ生かス事が出来るとイうわケだ！　我ガ欲シイのは絶望トイウご馳走！　オマエがそれヲ与エてクレるならば、我はオマエに生を与エよう！　生キル為に必要な力も与えヨう！）

シュエルはその提案をすぐに承諾しなかった。

思い悩むようにして俯く彼を見て、影はイライラとして膨張し壁や天井に、より大きく広がった。

（オマエは何故躊躇シテいる！　オマエは困ッているのでは無かッタのかァ！？　ホら、アレを見ロ、湯気ガあんなニも立ち昇ッている！　モうスグ準備が完了すルぞ！　そうナれバオマエは溶カされてスープ、汁にナッて食べラレてしまうンだァ！　同ジ人間という種にナァ！　オマエは聖なる神の力を信ジル者らシいが、ソレが神を冒涜スルような行為をしてイる奴に殺さレテいいのカ？）

「神を冒涜するのは貴様のような悪魔も同じこと。貴様が悪魔だとわかったのだから、それに力を借りてでも生き延びようとは私は思わん。己の内側にある神と天におわします神、それを信じる騎士の称号に恥を塗るくらいならば、私は今ここで生を諦めよう。誇りを持ったまま死ねるならば、堕落して生きるよりは遥かにマシだ」

（ほウ……。ナルほど、ナかナか、気高いジャナイか……汚らシい心ガケだな……）

「汚いといったか……？」

（ああ、キタネぇきタねェキタネェなあ！　誇リなどとのたマいやがって！　オマエのような奴ガ我は大ッキライでね！　アア、アアああ、ああ、決メたぞ、きめタ、我は決めたゾ！　我ハオマエの誇リという汚物が無クナるソの時まで、オマエに纏いツいてヤル。オマエが嘆きモガいて誇リを全て失ウその時マデ、オマエを生かし続けてヤルよ！　これは取引じゃねェ…一方的ナ我からのプレゼントさァ！　たダし、受け取リ拒否は出来ナイ絶望の贈り物だケドなァ！）

「よく喋る奴だな」

（キキッキキッキ…キキ…余裕ぶってるが、そんなイキガリもすぐニ出来なくナルぜ。これまで我に取り憑かれて絶望を絞られ尽くしたヤツがドンナ顛末を迎えタのか、教エテやろウかなぁ）
「興味がない。それより、どうするんだ。どうやら、私を生かすも殺すもお前次第という状況になってしまっているのは、遺憾だが事実らしいし。まあ、好き勝手にしてくれたらいい」
（キキッキキッキ……言っタな。言ったな言ッタな。ならば始めヨうカ。楽シい楽しイ時間ノ始まリさ！　アア、こんなに汚らシイ奴は本当に久しぶリだ……。まずはアノ人間二人を我ノ魔の力ヲ使ッて殺すことからだなぁ……キキッ…悪魔のヨウな趣味ヲ持った人間ダ……闇デ覆って地獄に叩キ落とシても耐えラれるだろウよ……灼熱の炎に焼カレ、巨大ナ針に貫かレ……）
「あれは人間なのか……。ああ、そうだ、一つ言い忘れていたが、私はまだお前のプレゼントを開けていない」
（……ハッ……？）
「神光が集まらなかった原因はお前の妨害にあったと見た。だが私はもうお前の正体がわかった。ならば。取り憑かれていると言えども、まったく抵抗できないという訳でもない」
（オマエ…何ヲするつモリだ……）
「何をするつもりじゃない。もう、したんだよ」
（まサか…オマエ……）
「縄で縛られていても聖方陣を組むことは出来る。五指さえ動けばな」
（しまッ……）
「油断して長々とはしゃぎすぎだ。……マヌケめ」
　シュエルが悪魔をマヌケと評したその瞬間に聖方陣が展開された。聖方陣は神光を使って発揮される力のうち、もっとも初歩的な技であり、それゆえに力も僅かたる程度なのだが、魔の者が神光を妨げているのを止めさせることができる効果はある。
（チッ……小賢しイ真似をしやガッタ……）

「……はあああああああ……」
先ほどまではまったく集束されなかった神光がシュエルの祈祷によって『力』となる。彼は空に浮かぶ青白い月のような、幻想的であり神の威厳を含んでもいる煌きを身体に纏う。
そして青白い刃を『力』によって構成すると、その刃で縄を斬り、手足の拘束を解いて自由となった。
青白い光はレンガの家屋全体に広がった。それこそ神光の威厳。
魔の者を滅する騎士の信仰。
「な、なにこれ…！」
「青白い輝き……。一体何者です、この人！」
突然部屋に広がった光に気が付いた二人が振り返ると、食事を楽しみにするが為に浮き立っていたそのわくわくは打ち砕かれ、背筋を一瞬にして凍らせることになった。
彼女ら二人の背後には青白い光の根源と思わしき、より力強い青の煌き。そして縄で縛っておいたはずのメインディッシュが、真っ青の刃を握って、射るような目付きで彼女たちを見ている。刃や纏っている光は青だが、その光を纏っている本人自体は白く染まっていて、明らかに尋常の様子ではない。
これは人間じゃない。怪物……。あるいは……。
紳士と少女は後悔した。どうみても人間だと思い、ご馳走だと楽しみにしていたのに。
とんだ化け物を拾ってしまったらしい、と。
二人は窓から逃げ出そうとしたが、金縛りにかけられてしまったらしく、身体が指一つですら動かせない。なんと、瞼を閉じることすらできなかった。
「垣間見よ。これが神を己に宿し、そして天に住まう神を信ずる者の神光なり。さあ、汝らを断罪する刃にてその身を洗われるが良い。そして天に赴き、汝らの罪と向き合い、再びこの世に無垢なる者として降りてくるその時まで、ああ別れの時だ。汝ら別れの歌を歌え。罪深きその身との別れと、罪多き世界との別れを歌え。グッド・バ

イ」

それは詠唱という奴だった。

だから彼女ら二人の目の前に聖方陣が形作られ、その方陣の中から、青白い光によって構成された何かがヌルッと浮かび上がってきた。

それは巨大な掌を持つ、鎧。鎧そのものだから顔も無いし足も無い。しかし掌だけはあった。巨大な掌を二つ持った、物言わぬ青白い鎧の怪物。厳粛な装飾がされている鎧。レンガ家屋の天井にぶつかるのではないかという程に大きい。

鎧はその左右についている両手で、金縛りの紳士と少女の身体を掴み取って、持ち上げる。

二人は悲鳴を上げたいが、口を動かすことができない。目の前には物言わぬ鎧。その背後には光を纏った怪物。そして怪物が新たに召喚した、人間一人分ほどの長さがある青の長槍二本。

その恐ろしい景色を眺めるのを最後に、二人は天に召された。

頭から爪先までを串刺しにする長槍に貫かれて。

浄化されたのだ。

5

力を使うことによって浄化を終えたシュエルは、青い光や白い光を拡散させて、一息をついた。

レンガの家屋にはシュエルと暖炉、食材がぐつぐつと煮立っている鍋。窓から入り込んでくる寒風。雪は降っていないようだが、外に出るならば防寒対策は欠かせないだろうと思える。

巨大鍋の中身が気にかかり覗いて見ると、見た事の無い食材の殻がスープの中で浮いている。元々は何かの生物の表面に張り付いていた殻だろうが、その中身は溶けたと推測できる。シュエルも抵抗しなければそうなってしまう所だったのだ。

「人間が人間を食う……信じられないことだ……神よ、私達を、お許しください」

彼は言いながら、祈祷のポーズを取った。

そしてその場で嘔吐した。

彼自身が驚いてしまう突如たる嘔吐だった。しかも吐き出される嘔吐物の色が、濁った禍々しい真っ黒だ。鍋の中に吐いてしまったので念入りに作られたスープは台無しになってしまったが、問題はそこでは無い。シュエルは全身を悪魔によってコントロールされる気配を感じた。寒気。不安感。予感。恐怖。

シュエルは予想はしていた。悪魔からすれば、こちらが力を使ったすぐ後というのは格好のチャンスなのだからその時を狙ってくるのは当然だ。消耗しているし、しかも浄化という行為をするにあたっては、断罪した相手の罪を引き受けることになるが為に、悪魔の好むような負の力が体内で増幅している瞬間でもあるのだから。シュエルは、こうなることは、わかってはいたのだ。言ってしまえば先ほどの行為は悪あがきに過ぎなかっただろう。悪魔はもうシュエ

ルの身に取り憑いてしまっているのだから、悪魔をソノ身から祓わなければ、体を支配されてしまうのは当然だ。
しかし悪魔を祓うには、騎士団員十人以上でしっかりと聖方陣を描き、手順を踏んで儀式を執り行なわなければならない。
今、シュエルは一人だ。そして何処か、何かがおかしいような場所にいる。
何で青白い月が浮かんでいる。何で堕魔を知らない人間がいる。騎士団すら知っていなかった。人間を食べる人間などがいることが、そもそもおかしいと感じられるのだ。
こんなおかしな所にいては、悪魔を祓う準備をできるはずも無い。
シュエルは吐いた。吐き続けた。真っ黒い嘔吐物をどんどん鍋の中に吐き落としてしまう。吐きたくなどは無いが、やめたくてもやめられない。
やがて真っ黒い嘔吐物は、悪魔の形を取るようになってきた。鍋に貯まった真っ黒の嘔吐物がそれぞれ固形へと変じて行き、集束し、一つの形となるのだ。
それは影そのものと言える真っ黒い獣。
シュエルの目の前にある鍋。そこから魔獣が姿を現した。
そして言った。
（オマエのそノ罪を引き受ケるトイう汚らシい行為、我ニとってハ餌の供給と一緒ダ。そうイう意味でハかなり気に入ッた。我、オマエの影トなりて多くの罪ヲ貪ろウ。キッキキ……キキキ……楽シいパーティーの計画ヲ立てテおいたぞ。サァ、影ニ呑マレテ黒ク染マレ。こノ身体、そしテあの断罪ノ力……我ガ利用スル！）
シュエルはひどい災難に出くわしたということだ。
彼の身体は黒く染まって、漆黒の羽で空を飛んだ。
黒騎士になったと言えば聞こえは良いが、悪魔に身体を支配されただけのことだ。
こうしてシュエルの数奇な運命は回転をはじめた。
そういうこと、かもしれない。

6

『神を信じる者と悪魔を信じる者の会話』

『神側の提案』

全員が同一のインプットをしていてはアウトプットも同一になるばかりだ。それは問題だ。

インプットがそれぞれ違うからこそ、違うアウトプットが発露される。それはわかりやすい言葉で言うと、アイデア、ということだ。同じインプットをするばかりでは、アイデア（可能性）は収縮するばかりで、そして人々の生活を手助けする或いは救済さえする可能性を持つものがアイデアなのだから、ないがしろにしてはいけないのだ。一つの歯車として生きていく社会を形成することはだから危険なのだ。多種多様な価値観を持つ人々がいるから、一つの出来事に対して感じ方が違うものを感じる人々がいてこそ、やはり多種多様なアイデアは生まれるのだ。

『悪魔側』

可能性を広げたいなどという考え方は、所詮自らの欲望に沿った意見ではないか。なぜそんなにもしぶとく生きのびる可能性を広げようとするのか。生き延びる確率を上げようとするのか。

「神側」

それは我々人間がまぎれもなく生物だからだ。生きているからだ。生きていこうと思うからだ。

根本的なところを肯定してくれる神の存在があるから、自身が生きることを肯定できる。多くの罪を抱えようとも。

『以降、悪魔側、神側くりかえし』

『それが汚らしいと言っているのだ。自らの根本的なところを肯定してくれる神などという存在は無い。それを理由にして厚かましく生きよう生きようと願うその魂胆、許すまじ』

「なぜ生きてはいけないのだ」

『我々は悪だ。魔の者だ。世に暗雲を垂れ込ます者だ。
そういう存在が生きよう生きようとしても世を食い潰すだけのこと。
ならばせいぜい惰性で存在するしかない。死ぬべきなのだ』

「貴様たちは自身を否定するのか。生物である己を否定しているから、自らを死なそうとしているということだ。おかしなことだ。生物なのに」

『人間とは思索できる生物だ。その思索の中で出た結論が死ならば、それに従うことは実に人間らしいことだ』

「だが人間である前に我々は生物だ。生きているものは、生きて良いのだとわからないのか」

『なぜ生きているから生きて良いなどと言うことができる。その自信は何処から来る。
　我々は数多くの罪を犯すあくどい存在ではないか。汚らしい存在ではないか。そんな自身に誇りを持つ貴様らは所詮、勘違い甚だしい、自らを悪だと認められない臆病者だ。無知なるものだ』

「所詮、相成れないということか。私には生きているから生きようとするという絶対的な肯定があるのだとしか言えない。その肯定があるからこそ、私達は誇りを感じ、その誇りを糧にして世で規律正しく生きることが出来るのだ。お前らのように悪行に身を染めることも、自らを堕落させることもせず、世界を良い方向に導くことができる」

『人間にとっての良い方向にすぎないだろう？貴様らは所詮、自分勝手なのだよ。世界を良い方向に、だと？貴様らがいるせいで迷惑している存在がいないとでも思っているのか？貴様らが消えることによって喜ぶ生物は数多くいるのだよ。そういうものを殺すのが貴様らだ。それが世界を良い方向に導くなどと正義面する姿は、醜くて仕方がない。汚くて仕方がない。滅されれば良いのだ。我ら人間は汚らしい。堕落して悪行に身を染め、業を背負い、死に果ててしまえばいいのだ！』

「そうやって自らを否定して、悪行に身を染めた所で、他の生物たちを貪ることはお前たちも同じではないか。食物を必要とし、酒を飲み、蟻を踏み潰し、他者を傷つけて、生きているではないか。自らを悪だと断定した上で世界を堕落させた上で、他者も傷つける。そうやって全てを傷つけて、貴様らは結局何も為さないというのか

？とんだ意気地無しのようだな、悪魔に魅入られし連中というのは！」

『黙れこのクズが！貴様らは鈍感なのだ。地の底から這い登ってくるような、敗者たちの惨めな声が聞こえないのか？聞こえないから貴様らは、それでも己を肯定することを止めず、自らを発展させようとする。たかが一つの生物に過ぎないくせに。他の生物を蔑ろにしているのだ！強者として驕り昂ぶり、自らを絶対的に肯定してくれる神などという空想の玩具まで発明して！どんなに罪を背負っても、自らの生を肯定する。汚い、ああ、汚い！』

「我々人間は特別なのだ。生物の中でも秀でた存在だからこそ、ここまで繁栄し、様々な文明を築き上げてきた。人間とはそういう特殊な生物であるからこそ、地球という惑星の管理者でなければならない。我々が世界を主導するのだ。そうして他の多くの生物を導いてやればいい。それが我々の役割だ。だから高度な知的能力を持ち合わせているのだ」

『馬鹿め。それが驕りだと言うのだ。何故他の生物たちが貴様らの導きを必要としているというのか。貴様ら、それは言い訳にすぎん。自然とは、全てがそのあるがままの姿であるだけで、互いが繋がり合って営むものだ。それらが人間の導きなど欲するわけがない。むしろ、人間とはその知的能力の高いがために、あるがままの姿でいようとしないから、生物たちをあるがままの姿ではないようにしてしまって、おかしな方向性に導くに違いないよ。そうして地球を狂わせていくのだ。

あるがままの姿であれない人間どもは、死んだ方がいいのだ。絶

滅するべきなのだ。人間とは地球という自然のシステムの中での癌だ』

「ならばあるがままとは、何なのだ。知的能力を利用して様々に活動する我々は、その知的能力のあるがままに生きているに過ぎない。それは自然的ではないか。どこにも違和感などない。多くの生物たちはそれぞれ、自らが持っている能力を駆使して、自然界の中で自然に生きている。

　我々もそれと同じだ。知的能力を使って、自然界の中で自然に生きているのだよ。だから癌などではない。我々も結局、他の生物と同じだ」

『なら導くというのはどういうことだ。他の生物を導くなどということを言い出す驕りは、どこから湧いて出て来たのだ。同じ生物に過ぎないのならば、他の生物に過干渉する必要などあるまい』

「ふむ。そうやって導きたくなるのも、人間の知的能力が発露されているためだろうな。能力を発揮してしまうのは自然なこと。ならば導きたくなってしまう気持ち、思考は、自然的な部分と言える。だから正しい。我々人間は間違っていない。なんら不自然なことはしていない。知的能力という手段で、他の生物たちを導くことによって生きようと思うことは、自然なことだ」

『どこまでも強者であろうとする存在なのだな。つまりそれは、自分の支配下に他の生物を置く事でその生態系を理解し、自分たちにとってそれが利なのか害なのか判明させたいという思考の下、そう

しているのだろう？導こうとするのだろう？そうして様々なことを知ることによって、世界をソノ掌の中に納めようとする姿勢。非常に醜い。汚らしい。ああ、強者だな人間というのは。だから驕り昂ぶっているのだ。ずるいのだ。卑劣なのだ。他の生物たちをやがて食い潰すに違いない。現に昔から、自分たちの害になる存在は極力消そうとするのが人間だ』

「生物としてなんらおかしなことじゃない。
自然なことだ。
私達はこれからも生きていく。強者だろうが何だろうが。
生きていくために、思索する。神が想像の代物だろうが、それが我らを手助けしてくれる存在なのだから、それを信じるべきだ。
オマエたちは悪魔などを信じて、辛くはないのか？悪魔はお前たちの生を否定する。お前たちを殺そうと思う。死ね、と言う。そんな存在をなぜ信じる。
神を信じるがいい。さすれば我々人間は、まだ生き続けることができる。この惑星の中で。
導き手として。栄えしものとして。
さすれば良い死に方を迎えることができるぞ。蛆に食われることもなく、火葬してもらえるぞ？病原菌に苦しめられて息果てるなんて嫌だろう。熊に喉を引きちぎられるなんて嫌だろう。
だから私達は繁栄したくなるんだよ。
私達は一種の生物にすぎない。
だから他の生物たちに『嫌』と感じさせられないように、力を振い、能力を使うのだよ。
それこそが生物としての在り方。
死ぬまで続く繰返しさ」

『私はそれでも悪魔を信じ続けよう。悪魔は、もしかしたらたしかに、私を否定する存在で、もしかすると私に敵対する存在なのかもしれぬ。もしかしたら他の生物たちが私を呪って、悪魔を生み出して私達を苦しめるのかもしれない。死ね、という呪いなのかもしれない。

だがそれでも私はこの内側に巣食う悪魔という存在を信じよう。何故ならば、そうしなければ神は好き放題で、そして驕り昂ぶるばかりになってしまう。

そうか。私が悪魔を抱える理由が今分かった。

私も所詮人間を『生かす』ために悪魔を抱えているに過ぎないのだ。

神を携える連中に思索を呼び起こすために、反論を持ち掛ける。これによって神の連中は思索をすることによって、対話をすることによって、様々な問題に気がついていく。実際、今先ほど対話をしたことによって、忘れていたことや気が付かなかったことを、理解できた。思い出すことが出来た。

ははは。何だ、結局私達悪魔を抱えし存在も、人間という種を繁栄させるためにいる存在に過ぎないんじゃないか。ははは。そういうことか。

ならばそれもまた一興。我々はこれからも悪魔を信じようではないか。

所詮、人間か』

7

大樹の幹。その一部分を削ることで人の入れる居住空間となっている部屋に、紫色のショートヘアの女性がいて、ベッドに横たわったまま本らしきを手に持ち、ページをぱらぱらと捲っていた。大きめの瞳に、綺麗な肌。天井にくくりつけられている火を灯すランプの朱色に染められながら、まばたきをしつつ、呼吸をしつつ、本を読んでいるらしい。

彼女は読み終わったのだろう、悪魔やら天使やらと出て来たその本、いや手記を、掌でパタンと閉じる。

実際に悪魔に取り憑かれていたらしいおじいさんの手記は、本の中程で終わっていた。そこに書かれていたのは、随分と、何かに取り憑かれたような内容だったが、おじいさんが青年期に使っていた手帳なので、おじいさんが晩年になっても年甲斐も無く鼻息荒くしてふんふん、こう意味不明なことを語っていた訳では無い。にしてもちょっとなぁ、と壁に取り付けられている鳩時計で時刻を確認してから、彼女はベッドから身を下ろす。

（まあ、若かりし頃の抹消したい手記だね……。形見として家を出る時に持ってきたから、この手記に書かれているおじいさんの醜態を、落ち込んだ時に見ることで楽しませてもらってるけど…。ああ、私は何て孫だろうか。しかし捨てるチャンスはいくらでもあったはずなのに倉庫に閉まっておいたのだから、読まれてしまうのも仕方が無いし、それにおじいさんは馬鹿である。こんな文章を書く時点で馬鹿丸出しの、アホ面野郎である。つうかキモイ……。何ておじいさんだろうか。ああ、ちょっと泣けてきた。……あ、時間だ。放送、放送っと）

彼女は、魔導液晶投影機械の起動円を押すことで四角の画面を空気中に広げる。解像度がだいぶ悪い旧式の投影機械だが、公共電波を傍受できるのだから、文句を言ってられない。

彼女は猫の顔面が大きく描かれている座布団から立ち上がって、台所にある冷蔵庫から健康茶を取り出す。健康茶をコップになみなみ注いでから、猫の座布団に座りなおす。なんか鼻がムズムズするので、ティッシュを一枚手にとって鼻をかむ。かみ終わった時に、丁度広告映像が終わって、放送番組が始まっていた。丸めたティッシュをゴミ箱にポイッ。

屋内の宙に四角形で展開されている画面に、モデル体型の青年が映し出される。華麗としか言い様が無い動作で一時間踊り続けることのできる、最近話題のノージィという男性である。目鼻立ちすっきりしていて、鷹のように勇ましくかつスマートな全体像、それでいて…言葉にできない何かがある！　そのほどばしるような才気、魅力のせいでみんな虜。一ヶ月に一度彼が考えたオリジナルの踊りが披露されるのだが、毎月毎月、脳髄を直接突っつかれるような刺激を彼は放送越しに提供してくれる。

「アギャー！」

と絶叫したくなる程刺激的だが、アギャー、だなんてそんな、みっともない醜態を晒すことは慎しむ。彼女は鼻をかむ事も恥らう乙女なのである。乙女。うぐぐ。鼻はさっきかんだが。そんな彼女は名をニュと言う、若年の子であり、自らの年齢はわからないが、十四、五年以上は生きているはずだった。彼女自身、自らの年齢はよくわかっていない。氷彫師として生計をたてているが、最近は調子が良くないので、その鬱憤を晴らしたい時にこの映像を見るのが習慣になってきて、依存気味であり、つまり中毒になりつつあるのだが。

ニュが魅入る映像の中で、ノージィは空中で斜めに二回転ほどしてから、綺麗に両足で着地、したかと思えばもう次の動作に入っていて、狼が獲物を狩る時のような目付きをしながら、ミスなど一度もせずにずっと踊り続けている。超人的な身体能力だなぁ、とニュは惚れ惚れ思った。

が、幸せな時が阻害される。

漆黒の伝書鳩が、ガコン、と専用扉をくぐり抜けて入ってきた音を聞いた瞬間、彼女は青ざめる。
ベージュの壁に掛けられている鳩時計によれば、まだその時刻じゃないのに。短針はまだ6。普段は7だというのに。
ニュはわなわなする。踊りを見終えてからそれに臨むのが日常なのだが。
楽しみを邪魔された。だが漆黒の鳩が来てしまったのだから仕方がない、彼女は魔導液晶投影機械に付されている録画機能を利用してノロジの踊りを録画してから、鳩が運んできた伝書の解読を開始する。
『死死』
ニュは面倒だなぁ、と感じる。今日は文章がいつもより長い。ということは、暗号を解読する手間もいつもよりかかるということだ。
「…にしてもひどい暗号…いつものことだけど…」
ニュは愚痴をこぼしながらも暗号を解読していく。死はそれぞれ色が違う。翡翠。瑠璃。朱。黒。緑青。水。こげ茶。まあ様々な色の『死』があって、解読は中々に面倒な部類だが、三十分程度の時間を掛けて解読は完了した。この物量にしては最速タイムだ。ニュは邪魔をされた怒りを忘れて、最速で達成できた喜びでほくほくした。ほくほく。
「さて、じゃあいこ…」
普段から着用している青色のポンチョを身に纏って、寒空に出る。青白い月は雲と寄り添いながら天に漂っていて、夜風はいつも通り冷たい。両手にハッーと息を当てながら、彼女は暗号に指定してあった場所へと向う。
お楽しみの時間を邪魔されたのだから、恨み言の一つでも言ってやろう、と思いながらでこぼこした根っこの道を歩く。

8

ここは大樹の中に作られし都、『Ｙｇｇｄｒａ』．

青白い月が夜空にあり続ける世界の中で、もっとも人類が平和的に暮らしていけると評されることのある都。樹の根がパイプ管のように細かく地面を這っていたり、壁や天井となっている箇所もある。人が住みやすいように大樹の幹にあたるあらゆる部分が削られ、掘られ、人為的なものに開発されているが、それでも元々が巨大すぎる大樹であるために、人が住んでいる箇所は一部でしかない。その大樹のほとんどは、いまだ人の手が加えられていない樹の幹そのものである。世界に他に類を見ない超巨大大樹。そのほんのわずかの部分を人間は使わせてもらって、都とし、Ｙｇｇｄｒａと名付けたのだ。

文書を丸めて懐にしまい、てくてくと道を歩くニュ。青白い月明かりと街灯の黄色に照らされる彼女の顔つきは屋内にいた時よりも、強張っていて、青紫色の両瞳はキョロキョロと辺りを警戒している。ニュの目に映るのは影の濃い木々。大樹の中に生えている木の連なりが、ただでさえ暗い夜道に一層深い影を作り出しており、『鬱蒼』という名の怪物のよう。

実際犯罪者の多い都ではある。人類にとって平和な場所ではあるが、人同士でのいざこざが無いということではない。暗がりの多い道を一人で歩くのは危険なことだが……と、木の影からボロ布の不潔な男が横滑りするかのような勢で、突如ニュの前に現れた。

舌が上手く回っておらず、言葉は奇妙な呻きにしかなっていないが為にめちゃくちゃ気持ちが悪いに加えて、手足が小刻みに痙攣している。ボロ布だから寒さに凍えているのかもしれないが、瞳孔の開き具合から見て、クスリをやっていると見て間違いなかった。痙攣が尋常ではない。

男はその激しい痙攣をしたままにニュに近づいてくる。途中で、

彼は腰辺りから何かを取り出した。暗闇のせいで良く見えなかったが、途中街灯の黄色い光に照らされたおかげで、ナイフだとわかった。ちらつかせているので、ニュは立ち止まるしかない。

「安静を奪取されてワタシハ悲しみに暮れているのだああぼんぼんと鐘を鳴らせ馬鹿どもああぐへええ声が聞こえねえあああワタシは悲しみに暮れているのだああぼんぼんと鐘を鳴らせ」

突如として呂律が回りだしたと思ったら、今度は意味不明な言葉の羅列。

ニュは、恐怖した。背筋がゾッとした。クスリをやっている奴はよく見かけるが、これは滅多に見かけない、かなりヤバイ感じの狂人だ。さすがに気持ちが悪すぎる、とニュは後退りするが狂人は痙攣しながらもじわじわと近づいてくる。街灯を通過すると照らされる狂人の顔は、もう化け物にしか見えない。血走った眼、飛び出すかと見紛うほどに眼は出っ張っている。ナイフを躊躇なく突き出してくるだろうことが容易に想像できる、異様さ。

そしてニュの目前にまで辿り着くと、まるで機械がそういう動作をしただけのような無機質さでナイフの刃の尖端が、ニュの心臓めがけて迫った。

でもニュは背筋を強張らせつつも、そのナイフを握っている相手の右手をつかみとって捻りあげる、なんて程度のことは軽く出来たりする。クスリやってる奴の思考回路は基本バグっているけど単調ではあるから、つまり幸福の晩餐歌。相手の腕を捻って、ナイフを無理矢理落とさせて、あとはもう軽く膝蹴りを、てい、とかましてやって終わりということ。よかった、よかった。

ニュは狂人が気絶したのを見てから襟を掴み、木陰に放り投げてやった。ごん、と鈍い音が鳴ったのでだいぶ痛そうだったが、自業自得だ。

ニュは腕時計に眼をやる。暗号文に書かれていた時間まで余裕はある。

（一応治安隊に連絡しといた方がいいかな）

そう思った彼女は地面に小さな方陣を描く。せいぜいお茶碗程度の大きさの方陣だ。
カッカッカと懐にしまっておいた黒のチョークで書き切り完成させると、方陣が光り輝き、そこから目映い光を放つ球体が誕生した。
そして、天へと伸び上がると、治安署の方に消えていく。
「よし。これで連絡がつく」

9

もこもこしてる桜色の耳当てと、桜色の手袋。

ニュは懐からそれらを取り出して装着した。そして相変わらず威圧的な蒼白の館、その目前に立ち、ハーッ、と息を吐いてみると白くて冷たい。館に入ればさらに気温は低下する。蒼白の館には青白い月の光が貯められているために、一年中Ｙｇｇｄｒａのどの場所よりも寒い。防寒装備しなければガチガチ震えて十五分もその場にいられない。蒼白の館とは厳寒の場所。人が住まう環境としては劣悪極まりないが、だからこそ、そこには魔女が住んでいるのだ。

冷酷たる魔性。彼女の横を通り過ぎるだけで神経は強張り、無表情が貼り付いてしまい、触れれば氷にされて蒼白の館で氷人形として飾られてしまう。運が悪ければ八つ裂きにされる。彼女に関する都市伝説は数多くあって、生きている伝説としてＹｇｇｄｒａに住まう人間たちからは畏怖の対象とされている。彼女は恐怖そのもの。だから氷の魔女と呼ばれるのだろう。

で、ニュの職業は、氷彫師だ。

胃が痛そうな姿勢をしながら、館の門前にて、ハッー、ハッー、と何度も白い息を吐きながら、ニュはＹｇｇｄｒａでもっとも巨大な建築物であり、また同時にもっとも足を踏み入れ難い建築物でもある蒼白の館を見上げている。青白い月光が館の外壁全てに充満していて、常に光を放っている。見る人が見れば幻想的とも評するような、マリンブルーの色をしている館と敷地。その領域はすなわち氷の魔女のフィールドだ。すなわち門前にてニュが立っているということは、氷の魔女の大きな口の前で小魚が、ぴく、ぴくと忙しく跳ね回っているようなもの。門が開けば、噛み潰されることもなく嚥下されるがごとくに、魔女の体内に吸い込まれるということだ。

Ｙｇｇｄｒａに住む多くの大の男たちでさえ敬遠する場所なのだ。そんな所に年端も行かない若年の、紫色の頭髪の少女が寒そうにし

ながら突っ立っている光景というのは、あってはいけない、いや、ありえるはずのない、光景だった。
しかしニュは手厚い防寒装備をするだけで、間違いなく蒼白の館の門前に立っている。
豪奢な門の、その中心に付いている宝石は真っ青。彼女は桜色の手袋越しではあるが、彼女自身の人指し指でその宝石に触れた。触れた瞬間に彼女は凍らされて、呼吸さえも心臓の鼓動さえも止められてしまう。あっ、と悲鳴をあげる暇もない程の速さだ。
しかし数秒後には彼女は自由になる。呼吸や心臓の鼓動、血液が流れることも、再開させられる。つまり入って良いと認められたということだった。もしニュがまったく氷の魔女と関係の無い人間で、例えば荷物を届ける場所を間違えた郵便の人だとして真っ青の宝石をチャイムだと思い指で押したならば、その郵便の人は凍りついて二度と動き出すことをせず、氷人形として飾られることもなく、こなごなに氷塊とされていただろう。
豪奢な門が音も無しに開いて、蒼白の肌色となったニュを手招きする。もちろん、足を踏み入れない訳はない。一歩その領域に足を踏み入れれば尋常ではない冷え、身を芯から凍らされるような冷気が襲い掛かってくるが、彼女はその庭園、毒々しい魔花や魔草が整然と生え揃っている庭の舗装されているうねうねとした道を、小走りで走り抜けていく。両手は口にあてがったまま。
何度このような小走りで道を駆け抜けたことか。回数が多すぎてもはや覚えていないが、何時になってもこの芯を凍えさせる寒さは嫌いだ。慣れようのない凍え。庭が一番冷たくてゾッとするその理由は、魔花と魔草が道を通り抜けようとする人間の生命力を吸おうと試みているからで、もたもたしていると招かれた客だとしても死ぬ。生命力を枯渇させられて。
超巨大大樹Ｙｇｇｄｒａの土俵で魔花や魔草は育ちやすいらしいから、魔花も魔草もぐんぐん生長していて見事に禍々しい。まったくもって悪趣味甚だしいゲテモノ揃いなのだが、これが売り物にな

るというのだから世の中というのも禍々しい。
　ニュは唇お化けみたいな極彩色の魔花を横切ってようやく館内部に繋がっている扉、に繋がっている滑りやすい氷の階段、の前に辿り着いて一旦立ち止まる。で、ハァ、と吐息というよりかは、ため息をついて百段以上ある階段と対峙する。滑り落ちたら痛い。慎重に一段一段を踏みしめなくてはならない。かといって遅すぎても駄目。魔の毒にやられる前に、扉に辿り着かなければいけない。
　しかしニュは階段に対しては昇り降りに関わらず随分と慣れた。昔は相当しんどい思いをさせてくれた百段であったが、対策に対策を重ねる内に、マニュアルが完成して、その通りに身体を動かせば難なく突破できるようになった。大切なことは慎重さと大胆さ。そしてほんのちょっとの心の余裕。その配分さえ間違えなければ、余裕綽々だ。
　――よっ、と……。
　百の氷階段を突破した彼女の前には、ようやく扉。かんぬきのされているそれが開けば、魔女の住む敷地の、その館の内部が発かれるということ。青に染まっている扉をノックするまでもなく、氷柱のかんぬきが抜け落ちて、不可思議な力が働くことで物理的な力を介さず扉が自然と開いた。目に見えない魔の力。庭が魔女の口内だとすれば、館内部は内臓とも言えるだろう。彼女はそんな所に足を踏み入れる。いや、踏み入れなくてはならないのだ。
　――氷の魔女さん…入館しますよ……。
　返事はないのだが、それは入館を許可されているということ。気持ちを落ち着けるために深呼吸をすると冷たい空気が肺に満ちる。ゆっくりと体内から吐き出す息はますます冷たくて、その毎度恒例の冷たさを身に浴びることで緊張は高まる。胃辺りがギュルっとなって、ギューッ、となる。
　この胃の痛みを無理矢理心地よいものだと感じよう、と気休めしながらニュはまずは一歩目。扉を越えて館内に。その瞬間に足に針を突き刺される感触は、氷がチクチク痛いという感じ。足だけでは

ない。手も、指先も、鼻先も、頬も、お腹も。館に入った瞬間にチクチクとした刺激が生じる。ニュはくしゃみをしそうになったが、懸命に堪える。くしゃみなどしたら痛いなんてものじゃない。なるべく呼吸を最小限、そして歩幅も少なめに、ちょこちょこと歩くのが吉。

青白い色彩の集まっている空気をしていて、天井は雲を突き抜けるのではと思えるくらいに高いが、天井の側に近づけば近づくほど霧が充満していてもやもやしている。床は石らしき材質で、おそらく貴重かつ値段の高いものと思われる、チェス盤のような雰囲気。あまりに冷たいせいで鼻は利かないし鼻水がどんどん溢れてくる。そして両耳もひどく痛いし、キーンと耳鳴り。

そこは館のエントランスにあたる場所だが、縦にも横にも広くて十分な広さだ。氷の人形が社交ダンスをしているようなポーズを取らされて何体も置かれているのだが、どの氷の人形も表情は苦悶に満ち、地獄を現世で垣間見て衝撃を受けている、といった様子に見えなくもない。実際、どのような経緯で魔女に氷漬けにされた方々なのかはニュにはわからないのだが、進んで氷人形なりたがる人がいるわけもない。だから辛そうなのだろう。氷人形たち。

エントランスに音楽はオルゴールでかすかに流されているけれど、誰も踊りはしない。辛そうな表情を固まらせたまま、男女で向かい合って腰に手を当てていたり、片手を合わせていたり。オルゴールの奏でるメロディーは不協和音が多くて長く聞いていたくなる類ではない。ニュはエントランスを早々に抜けて、氷の魔女が客人を迎える時に佇む部屋、永久凍結の間、に踏み入る。チクチクという針で刺される感じがさらにひどくなり、身体が凍えて関節を動かすことがぎこちなくなった。動けなくなる前に氷の魔女の前に立たなくてはならない。ニュは足を急ぐ。ちょこちょこ、ちょこちょこ、と。永久凍結の間に置かれている氷の絨緞を進み、氷の玉座で肘をついて待っている魔女の目の前に。

魔女は欠伸をしていて、今にも眠りこけそうな様子。

あなたのせいでこんなに寒いのに、と思いながらニュは懐より死死文書を取り出す。

『死死』

様々な色の『死』が書かれている死死死文書を、解読したのを魔女の前で読み上げなくてはならない。上唇と下唇はくっ付いてしまっていて口がなかなか開かないが、痛いことにならないよう慎重に唇に力を込めて、ようやっと開いてから喋る。皮がむけそうになった。

「ほんじつは、あまりよいおてんきではありませんでしたね。さむいかぜがぴゅー、ぴゅー、とふいていてつらいかんじでしたね。ああさむかった。あしたもさむいだろうね。でもがんばっておしごと、おしごと、がんばりましょうね。ええと、これでおしまいです。きょうのあんごうはかんたんでしたでしょう。でも、あまえちゃだめです。ころすよ」

ニュはいつも通りの無意味な文書、その内容を読み終えてから、がちがち歯が震えるのを堪えようとするがそれを抑えようとすればする程、余計にがちがちしてしまう。だが、解読した暗号を全て読み終えた途端に文書が燃えた。様々な色の『死』が文書からシールのようにはがれると、ニュの周囲を取り囲んでから踊り回る。死はやがてどこかに飛んで消えてしまい、文書は燃え上がって火となると、ニュの両掌で燃え続ける魔法の火の玉となった。

掌におさまる程度の大きさの火の玉なのに、全身が温かくなって心地良い。

ニュは身体が温かくなるに伴って強張っていた神経も落ち着いていくのを感じる。彼女は桜色の耳当てと桜色の手袋を外してから、

氷の魔女に声を掛けた。
「本日は、一時間、いつもより早かったようですが」
氷の魔女は気だるそうにしながらも、火の玉の光を眺めながらこう返事した。
「立派な氷彫師になるには、時間を突如速められても対応できるだけの柔軟性というのが必要でしょう？」
ニュは口答えが過ぎるのが危険ということは身に染みて知っている。
下手に怒らせるとひどい目に遭わされる。氷風呂に放り投げられて棒で突っつき回されたこともあった。思い出すだけで身震いする。
そういうわけで、ニュは、静かな声で言った。
「あの、本日も、よろしくおねがいします」

10

ニュが連れてこられたのは業を修めるためだけに用意されている部屋。

以前放り込まれた氷風呂もあるし、明らかに業を修めるためにあるのとは違う拷問器具らしきものも揃っているのだが、拷問部屋の役割も兼ね揃えているというだけで、これから拷問されるわけではない。勿論、修業という名の拷問に等しい行為をされることは、魔女の機嫌次第ではありえるのだが。

以前ニュが作ることを命じられて一ヶ月丸々を費やして製作したアイス・メイデンが一度も使われた形跡も無しに、物々しく佇んでいる。確実に人間を刺し殺す狂気的な拷問器具だから使われない方が良いのだが、苦労して製作した一品であるだけに、なんだか氷彫師としては複雑な気持ちになる。しかしやはり使われないほうがいい。生活のために作ったけれど、あんな狂った作りの代物は一度も使用されないほうがいい。旧時代のころの或る女王が使用したと言われるアイアン・メイデンを模して作るよう依頼されて、結局まさにそれだと言えるものを作ってしまった。氷の魔女に仕置きされるのが怖かったからだ。氷針地獄を歩かされたくなかったからだ。

アイス・メイデンの他にも様々な器具や装置が置かれている。一見しただけではここを修業のための部屋だと見抜くことは不可能だろう。マッドサイエンティストの実験部屋もしくは狂人の拷問部屋かのどちらかだ。氷で形作られた負の領域。

桜色の防寒具を再び装着したニュの掌には、もう身を温めてくれる火の玉は無い。

彼女は自らの身一つで――氷彫師としての業を磨くために――試練に挑まなくてはならない。否応はない。生活がかかっているのだから、この時間を逃れる術はない。

真剣な眼差しで氷の部屋を眺め回すニュの隣に氷の魔女が近寄る

と、
「さて、じゃあ……始めようかね？」
と言った。ニュは無論、うなずく。そして氷の魔女が被っている氷で構成されているトンガリ帽子がちょうど横目につく。
氷の魔女は口調こそ老人のようなのだが、実に小さい。ニュよりも小さいし、声も若い。
見た目年齢は十歳くらいに自らを設定しているのは、その姿こそがもっとも多くの人間を油断させることができるからだそうだ。確かに、氷の魔女と聞くと、もっと無表情で相手を見下すような目付きをしているような、近寄りがたい美女、というイメージがあった。
しかしニュが月に一度相対しなければならない彼女は、姿形はどうみても幼い少女そのものだ。といっても全身を氷の結晶で模った服装で包んでいて、さらに作る表情、作る仕草、射るような目付き、は十歳の少女にしては鋭すぎる。実年齢は十歳ではないのだから当然だが。正確には知らないが百歳は軽く超えているかもしれない。魔女ならば身体を若返らせることなど造作もないだろう。
「こっちにおいで……。ほら、早くするんだよ……」
氷の魔女は魔方陣を一瞬にして自分の足元に展開させると、ワープして部屋の反対側へと跳躍してみせたのだった。ほら、早くするんだよと叱咤されても、魔方陣を、しかもあんなに早く、しがない氷彫師修行中の少女でしかないニュにできるはずもない。仕方が無いので、いつも通り、寒さに震えながらてくてく部屋の奥へと歩いていく。氷の魔女はぎゃーぎゃー向こう側からはやくしろという類の文句をぐちゃぐちゃ言っている。そういう所はなんというか、老人っぽい。声なんて完璧に幼い子供のそれで、まったくしわがれていないのに。
ニュは手招きされながら、自分も老いた時にはこの魔女に若返らせてもらえないものだろうか、と想像した。想像してから思わず笑っちゃいそうになる。笑ったら唇が痛いから笑わなかったが……氷の魔女がそんな気前の良いことをしてくれる訳がない。逆に年老い

させられたりはしそうだけど…そう考えたらゾクッとする。氷の魔女を怒らせたら、老人にさせられてしまうことだって、あるのかもしれない。魔方陣を作ることに関しては天才的な才能を持っているのが、魔女だ。どんな魔術だって扱えるに違いない。

と、そんなことを考えている暇は、手招きされた場所に置かれているそれを見れば無くなる。

魔女の指差す方角にある景色は、氷の塊が幾つも並んでいる景色。壁があったせいで影になっていて見えなかったが、氷の塊は計、百、いや、もしかしたら五百は超えているかもしれない…それほどの数の氷塊が等間隔に、縦横、並んでいるのだった。

「私が用意しておいた。全て、聖方陣を使わなければ溶けない氷だよ」

「せ、せいほうじん……？」

「そうだ。それも方陣の一種だ。要は、魔法陣の応用の形だと思えば良いんだよ」

「初耳です」

「当たり前だ。世に広まっている知識ではないし、そもそも扱える者自体の数が少ないんだからね。でも、お前にはこれを覚えてもらう」

「…お、覚えるんですか」

「そしてここにある聖方陣を受けることでしか溶けない氷を、溶かし尽くしてもらう。全て溶かし終わるまでは、家に帰ることを禁ずる。食事と寝床くらいは貸してやろう。それまでは寒さに堪えてみせるがいい。そうすれば三ヶ月は生きていける程度の生活費を渡してやろう」

「……ぁ」

あまりに突然すぎる言葉に悶絶させられる。聞いた限りでは今までで一番大変かつ面倒なことは間違いなかったからだ。様々な修業を詰んできた。氷彫師として一人前になるためだ。氷の魔女に見放されないようにするためだ。氷の魔女は彼女の師匠とも呼べる存在

であり、また同時にお客でもある。だから当然、断ることはできない。だが。
三ヶ月間生きていけるほどの生活費を与えてくれる、と言ってきたということは、三ヶ月間程度はこの修業に従事しなくてはならない可能性が高い。これまでずっとそうだった。十日分の生活費をくれてやると言われて仕事をしたら、八日間はかかった。一ヶ月分の生活費をくれてやると言われて仕事をした時は、一ヶ月と三日かかった。大体、生活費をくれると言った日の分だけそれに拘束されるのだ。三ヶ月、なんて今までで一番長い。
しかも今回は食事と寝床、と言った。食事をくれるのはいつも通りだ。しかし寝床なんてこれまで与えられたことはない。というのも、大体夜になったら家路につかせてもらってきたからだ。あの魔草が生えてる庭を毎日通らなくちゃいけないのは辛いことだが、この館に一日中ずっと閉じ込められるよりは全然マシだ。ここにいると本当に気分が滅入るし、なんだか自分の感情という奴まで凍りつかされてしまうような錯覚を味あわせられたりもするのだ。家に帰って温かいココアを飲むことで気持ちを緩やかにさせて次の日もまた頑張る、ノージィの録画してある踊りを眺めてまた頑張れるようになる、という、つまり報酬があるからこそ辛い修業にも耐えてこられたのだ。
それが今、寝床を与えてやろう、と言われた。泊り込んで修業しろということだ。
「……」ニュは悶絶したまま、ぷるぷる震える。
絶望で脳が真っ白に染まって、感情が固まってつまり思考停止。
「む、無理…ぜ、絶対に無理…こんなの無理に、決まってます……私は立派な氷彫師になりたいですし……ほとんど死ぬ寸前だった私を助けてくださった氷の魔女への恩に報いるつもりもあります……ですが、む、無理です。…三ヶ月もこんな寒い所で……せいほうじん、なんて魔方陣もろくに描くことが出来ない私には、きつい、としか言い様がありません……む、む……」

「無理ではない。死にそうになったら私が蘇生してやるし、まあ休日も数日くらいは与えてやるつもりだ」
「ひっ」恐怖からか喉が痙攣した。
「はっきり言って、ここが正念場だよ。あんたはまだまだ半人前だ。Ｙｇｇｄｒａという都市の中で氷彫師として認められるには、他の連中にはできないことを一つくらいは出来るようになる必要がある。あんたは、氷彫師としての才能はそこまでずば抜けていない。集中力が足りないからねぇ。だがしかし、私の御眼鏡が間違っていなければ、あんたは聖方陣の才能はそれなりにある。この世界で聖方陣の才能がある奴なんざ、あるだけで貴重なんだよ。いいかい、あんたはもうちょっと頑張りな。この三ヶ月間、みっちり聖方陣の修業を詰むんだ。そうすりゃ、一人前になるための材料は揃う。材料さえ揃っちまえば、あとはそれを伸ばしていくだけのことさ。材料を見つけることは私がやってやってんだから、感謝してもらいたいくらいだよ。さぁ、そんな呆けてないでまずは聖方陣の基礎って奴を教えてやるから、もっとしっかりしな。いいかい、私だって聖方陣は基礎までしかできない。でもあんたには応用まで覚えてもらう」
「へ……」ほとんど働かない脳味噌でも、今の最後の言葉には反応した。氷の魔女にできない…？
「そう。だからあんたに応用を覚えてもらいたいんだよ。その素質は、ある。そうすりゃ私だってあんたに仕事を頼み続けることになるさ。聖方陣を扱える奴ってのは需要があるんだよ。魔方陣に対する抵抗手段の一つでもあるんだからさ。世界中の多くが知らない知識なだけに、聖方陣に抵抗する手段自体はそこまで開発されていないしねぇ」
「む、無理ですよそんなの覚えられるはずがありません。ていうか私は氷彫師なのに聖方陣を覚える必要があるんですか」ニュはほとんど悲鳴みたいな感じで言葉を紡いだ。
　それに対して魔女はこう断言してみせた。
「あんたには素質がある。そして氷彫師に聖方陣は、必要ある」

そして怯えた表情のままどんどん破裂した風船のように縮こまっていくニュに対して、はっきりと上から言葉を押し付けた。
「命の恩人である私の言うことが、信じられないっていうのかい……？」
ニュはたしかに魔女がアイス・メイデンのある方角を一瞥したと思った。アイス・メイデンを見たわけじゃなくても、その近くには氷棺桶があったりもしたはずだ。断ればそれらを使われるかもしれない。ニュは涙を堪えた。ぐすっ、と涙腺に来るが涙は氷ってしまって厄介なことになるので、何とか堪えた。そして仕方がなく頷いた。
「はい、信じます」
幼い姿でありながらも正に鬼畜である氷の魔女はその言葉を聞いて満足したらしく、扇子を扇いでふんぞり返っていたら似合いそうなポーズを取る。そして幼い少女そのものである声付きでありながらも、実にサディスティックな表情の歪め方をするのであった。
「じゃあ、はじめるよ。あまり泣き喚いちゃだめだよ。……涙は瞳に凍り付くんだから、さ？」
わざと最後だけ少女そのものらしく振舞う彼女は、小悪魔なんてもんじゃないが、やっぱり姿形そのものは小悪魔らしい邪悪さ。偽りの小悪魔だとしたらその正体は何なのか。闇魔。鬼女。悪女。様々な表現はあるだろうが、やはりこの二文字が一番しっくりくる。魔女。

11

その新世界（Ｍｉｎｉａｔｕｒｅ　ｇａｒｄｅｎ）では国という集団がいくつかに分かれているが、これは国がいくつかに分かれているという点においては、かつての旧時代の人間文明と変わりない。旧時代と新世界で大きく違うのは『国』というものの在り方というのだろうか、一つ一つの国で色が違いすぎてまるで意図的に分けられたかのようである点が、旧時代と新世界の国の在り方に大きな違いをもたらしていると言える。意図的に色が分けられているとは具体的に言うと。

例えば『情動』を象徴とするＬｉｏｎという国がある。例えば『自由』を象徴するＦｒｅｅｔｅｒという国がある。例えば『怠惰』を象徴とするＤａｒａという国がある。例えば『破壊』を象徴とするＵｒｏｂｒｏという国がある。例えば『依存』を象徴とするＹｇｇｄｒａという国がある。例えば『慈愛』を象徴とするＰｅａｃｅという国がある。例えば……。

新世界にて存在している国々では、何か一つ、人間の性質を象徴とすることが常。

だから国ごとの色彩は、その象徴によって決定されるのだ。Ｌｉｏｎ出身という人がいるならば、その人は他国の人々からは『情動』的な人に違いないとみなされる。

もちろん、人によって性格には違いが出るものだから、当然Ｌｉｏｎ国にも『依存』とか『破壊』の性質を持っている人はいるだろう。いや、ほとんど全ての人が、そういった感情をわずかには持っているのが普通だ。だが『情動』を象徴とする国では、当然子供の頃から『情動』に根ざした教育というものを行う訳だから、やはり他の国と比べてＬｉｏｎには『情動』の強い人が多いことには自然、

なってくる。国内ではさほど『情動』的でないと評される人であっても、国外に行けば明らかに『情動』的にしか見えなかったりするのは、比較ということだろうが。

そういう国々同士、まったく性質が違うのだから交流が無いというわけではなく、土地柄によって収穫できるものが違ったり、気候の違いということもあって、他国同士で外交は欠かさない。また国民同士の交流も、方陣接続によって行われていて、方陣接続を利用すると遠く離れている人同士でもコミュニケーションを取ることが出来る。架空空間というものでは距離を関係なく交流を図ることができるので、もう喧嘩が絶えない。国同士でみんな性質が明らかに違うので、喧嘩が本当に絶えない。性格が合わないという悲惨さが方陣接続によって提供される架空空間では溢れているのだ。

「お前らマジ気だるそうだな。もっと熱くなれよ」

「そういう貴様らは馬鹿ばっかりだな。もうちょっと考える脳を持てよ」

「いやいやとりあえず全て壊しましょう。レッツ破壊と洒落こみましょう」

「まってよみんな。とりあえず落ち着こう…ね☆」

「媚びるんじゃねえよ気持ち悪い」

「うわーん」

「あー、こいつら全員死んでしまえば良い」

「おい。愚痴愚痴言ってないで、ちょっと走りにいくぜ。軽く百キロ走った後に、日の出を拝むのさ」

「暑苦しい。古臭い。つうかきもちわる」

「そればっかか」

「やっぱり壊滅させましょう！　お前ら全員、軍隊の炎に焼かれろ」

「そればっかか」

「お前らもそればっかだな」

「性質、性質」

「だははは」

「あはははは」
ただ慣れというものもあるから、形式的な喧嘩みたいなことにもなっているのが現在だ。
新世界が訪れてから、もう何百年も過ぎた。何かしらの理由の元、性質を象徴として分かれた多くの人々は世代を越えることで新世界が誕生した当時のことも本の中の出来事、文字の中での出来事、映像の中の出来事、として忘れた。旧世代が滅びた当時の絶望感をソノ身に味わった人間はもう全て死んでしまったし、昼が訪れなくなった時の身に染みるような不安、恐怖というものも体験してはいないのだ。誰一人として。歴史の中で、そういう一大事があったと記されているのを授業で見聞きするだけで、人々は青白い月漂う夜だけの世界を、通常のものと認識するようになったのは何時からだろうか……。
青白い月の麓で、人間はいまだ営みを続けている……。
方陣という新たな進歩を得て……。
そしてある種の平穏というものが訪れていた現実は、過去に密かに存在した異質からの連なりが原因でほころびを見せ始める訳だが、世界に住まう多くの人々はまだわかっていない。もうすぐ…もうすぐ始まる……戦乱と呼べばよいかもしれないし、混沌と呼称しても構わないかもしれない。だが事件が勃発していない今、まだ世界は平和だ。草原にてやわらかい風を浴びるような幸福を享受している国民たちは、小さな粒としても見えないカオスに気が付かぬままだ。だが、視覚化した時には動き出すことになるだろう。その時はもうすぐ、もうすぐ世に表出する。
表出するのはすなわち阿呆の極みであり、重要な嘘であり、滅亡への何かしらとか。
少なくともイノベーションは起きるかもしれなかったりしたりしたりしたり。したり顔。
あー、なんか違う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6866x/

そんまさよし

2011年10月19日03時09分発行